

LingvoオクトM+

2024年11月11日

(月曜日)

イーグレ姫路四階第3会議室

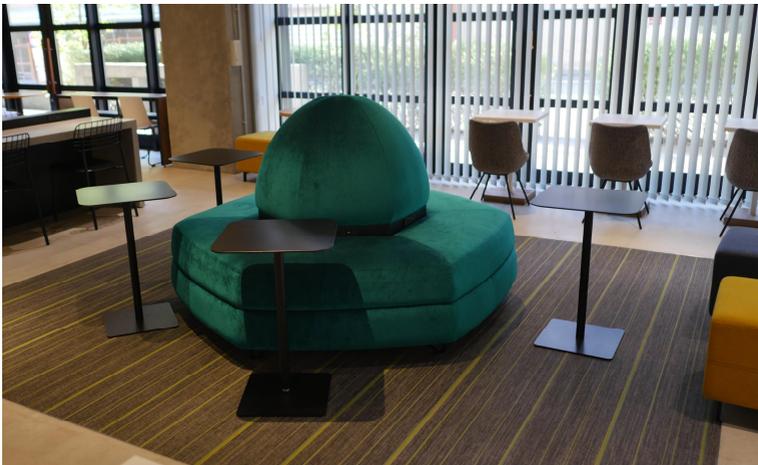
11月例会

○詩

○川柳

○エッセイ・小説

Vol. 25



Vol. 25

11月11日（月）イーグレ姫路
読書会講師：海埜今日子

次回12月9日（月曜日）
会場：姫路アイメッセ予定
読書会：講師未定

LingvoオクトM+の
参加は自由です。斬新な作品を募集します。

世話人高谷和幸

〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24

e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

12月の読書会をしていただく方を探して
います。自薦、他薦問わずよろしくお願ひします。

秋曇り

吉田ふみゑ

お隣さんが缶を壊している

明日は空き缶収集の日だからね

カンカンカンカン

カンカンカン

リズムカルに叩いている

カカンカンカン

カカンカン

カンカンカン

お隣さんどうしたの

リズムが変わったよ

窓から顔を出して声をかける

木枯らし一号到来でね

冷たいビールはもういいよ

今夜からお湯割りにするよ

なんて言いながら叩いたのよ

秋曇りの空のもと

缶を叩くひと

缶を叩く音を

ただ聞くひと

カルチャーショック

モス堀渕敬子

約40年前、今でも行われているかわからないが、神戸YMCAでのバイリンガルスピーチコンテストというのを見に行ったことがある。一人の参加者が、同じ内容のものを日本語と英語両方でスピーチし、順位を競うものだった。英語が母国語の人、日本語が母国語の人、インターナショナルスクールに通うバイリンガルの高校生もいた中で、印象的な参加者がいた。それは、神戸の高校で英語を教えている若いイギリス人女性だった。

彼女はイギリスを出る時友達に、「日本に行ったらカルチャーショックに遭うわよ。」と言われたそうだ。しかし、実際は日本に住んでいたアメリカ人との間にカルチャーショックを受けた、と言っていた。

それはパーティーに呼ばれて、あるアメリカ人の家に行った時のことだ。いきなりファーストネームで呼ばれ、コーヒーが欲しかったら台所に行って自分で淹れて、と言われたのでそうしたのだけれど、彼女はその時自分がリビングにいたら邪魔なのかしら、と思ったそうだ。

ざっくばらんなアメリカ式にイギリス人の彼女は抵抗を感じたようだ。このスピーチは、学校でアメリカ英語を習い、アメリカ映画をよく観て、アメリカ式イ

コール西洋式だと思っていた私にとつては目からウロコだった。

たまたま彼女がそう思っただけかもしれない。しかし、そう感じたイギリス人がいたというだけでも私には驚きだった。しかも雑談で出た話ではなく、スピーチコンテストという公の場で発表されたことである。

日本でも、お客さんを台所に入れて何かをさせるなんて考えられないから、イギリスに近い感覚だ。

ホームステイでもアメリカとイギリスでは随分違うようだ。

アメリカでは、よく言えば、家族の一員として扱われるという。なかには、庭に池を作るために穴掘りをさせられた人もいたときく。これは極端な例かもしれないが。

私はイギリス(スコットランド)でしかホームステイの経験はない。そこではお客さんとして扱ってもらった。

アメリカ式、イギリス式、どちらがいいとは言えないが。。。

すべては赤い

高谷和幸

家の二階を赤い西日が照らしていた。追手門に続く石垣の赤く染まった櫓の上で見張り役の侍がおかしな所作をして踊っておる。それに目が惹きつけられてしまったと亡父が言う。彼は長い遠征に出た殿が帰還する知らせの狼煙の、それは血のような、赤い火を見失ったのではなく、その知らせを姫に伝える役目を負っていたのだが、その後の不義を隠す謀殺を思い浮かべるだけで、身体がぎこちなく凍り付き、声も掠れてしまったのだらうな。よくあることだが、その動きはめちやくちやに引つ張られた操り人形に見えることがある。で、ここからだ、彼は聞き取れない小さな声で、知らないものには、知らないよ。と言ったらしい。あれから二千年も過ぎた。家臣たちが打ち鳴らす棒の音も、流

れた血も、彼も、その声もとつくに無くなつた。それを蘇らせ、言葉を聞くのが亡父。つまり死者たちのわれわれだ。今日の夕日は特別に赤い。知らないなものには、忘れたよ。全部が「亡心」になって、大きな物語に隠れてしまった。

※古井由吉著「聖耳」より引用があります。

犀はての象たちを思う

海林今日子

毛並みが、太陽のようにふるえた。つぎに線が走った。追いたい。まなうらで、たちどまった。いるけれど、みつからない。さわさわ、まぶたをひろげたら、会えるのだろうか。視線のむこう、だったかもしれない。夢が、どこかで、あとおし、みえないけれど、ずっとね。最果てという、声が出た。

西欧では二〇世紀初頭まで、犀は伝聞と想像の生きものだった。一五一五年にデューラーの描いた、鋌だらけの甲冑の雄々しい動物。その絵だけが、長らく彼らにとっては犀だった。だから、鎧を脱ぎ捨てた、動物園での実際の姿に、人々はがっかりしたらしい(1)。犀は、あんなにも、想像と現実をつらぬいて、目が合っていたのに。デューラーの犀の、まなざしは、ころん、どこか悲しい。かなわぬものが、かきたてる、のだろうか。願いのおくて、線がかさなるのかもれない。みたい。またたくまに、像が、おいで、うかぶから。

想像の「ぞう」は、元々は象さんの「ぞう」だった。〈象を思う〉というのが、本来の文字(2)でした。象は江戸時代、何度か日本に来たが、それ以前から仏画などの描写で知っていたから、隔たるようで、戸惑いがあったらしい(3)。弱さをたたえた、大きさにだったのか。象が、まなうらで、肌をかさねる。そんなふうに、しわしわ、おぼえていようと。視線のおよぐ、果てでした。

日本では幕末まで、実際の虎を見たことがなかったが、書物、毛皮などを通

して、古代から伝わっていた。一八四九年、九〇歳の葛飾北斎が描いた《雪中虎図》は、ほぼ絶筆だ。雪のなか、宙を、夢みるように進む虎。空想の生きものようだが、爪や毛並みがリアルだ。それは、夢とうつつ、あるいはこの世との境目に、うかんでみえた。線が、ぶれ、あたたかいよ、ひとすじ、かさなる。まなこは、どこへ？ たなびくよ、つめたいね。刹那の気配がいつも、まねく。追いたかった。犀の、視線が合った、その手前で、ざらざら、またたいてさ、会えて、よかった。虎と、きつと、千里を走って。ころん、ころんと、まなこのように、あ、まぶしい。じゃれあって、たましいです。

みたい、から、書く。すごいねえ、そこにいたんだ。波うち、線のふるえ、毛並みのおさと、皮膚に、にじんてゆく。犀の視線が、一滴、二滴、象へこぼれ、想像が、よせて、返して、書きとめたい。虎をたどって、でも。

みいられては、いけないの。暗がりか永遠のように、くいこむから。まなごしが、ちかちかと、線をちぎる。またかえってきてくれるから。わたしの犀はよい犀です。ながいお話を、ひもとくように、象さんです。視線のさきが、最果てならば、また、まなこをとじればいい。思うことが、めざめてゆく。

(1) 福岡伸一『芸術と科学のあいだ』「脱ぎ捨てられたサイの甲冑」

(2) 中西進『日本人の愛したことば』

(3) 図録『動物絵画の二五〇年』(二〇一五年、東京都・府中市美術館)

布草履

浜田多代子

おじいさんが

藁草履を指にかけて編んでいる

背中を丸めて武骨な手で

藁は三本ずつ手に持って

足しながら器用に編み込んでいく

藁は秋の収穫の後は

いくらでもあった。

木槌でたたいて

柔らかくすると

足になじんで心地よい

雨の日は背中まで泥をはね上げ

晴れの日 鬼ごっこをすれば

そこいらじゆう土誇りが舞う

汗を拭くと顔がまだらになった

子供たちと当たり前に暮らした藁草履

田舎から藁がなくなり藁草履は全くない

はいからばあさんは

峠にある道の駅で

色とりどりの布を裂いて作った

布の草履を買った

親指と人差し指の間には

元気になる体のツボがある

長生きしたいだろう

履かぬと損するぞ

近所のじいさんが言った

元気になるじやろう

じいさんの声

じいさんの足にも

な

光る駒

しろやあきのり

美しき遠心の力よ！

疾風迅雷のように旋回し、中芯から円周に行く程、煌めいて、

中芯は、鋭い縦への穿孔で存在感を放ち、光を集約するようであり、拡散もしている。

円周は、旋回による位置移動が激しく、周りに干渉し続け、

変わらない縦に穿つ中芯も、位置移動として、変わり続ける円周も、

結局は駒というその場所で、

気まぐれに旋回する場所を変えながら、駒全体である。

3. 141592653589793238462643383…

円や回転というものは、美しく、終わりがなく、

右脳のような、人間のような、人生のような、宇宙のような、心のような割り切れぬ、円。

垂涎抄・源氏物語―末摘花

瀬川健二郎

「末摘花」は、意外な展開をします。それがドラマ性を生み、物語を面白くしています。宣ひもしるく、十六夜の月をかしき程におはしたり。(命婦)

「いとかたはらいたきわざかな。物のね澄むべき夜の様にも侍らざるめに」と聞こゆれど、(源氏)「なほあなたに渡りて、たゞ一声もよほし聞こえよ。空しくて帰らむが、妬かるべきを」と宣へば……ほのかに掻き鳴らし給ふ、をかしう聞ゆ。何ばかり深き手ならねど、物の音からの筋殊なる物なれば、聞きにくも思されず。いとどう荒れ渡りて、さびしき所に、「さばかりの人の、古めかしう、所狭く、かしづきすゑたりけむ名残なく、いかに思ほし残すことなからむ。かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどももありけれ」など思ひ続けども、「物や言ひ寄らまし」と思せど、「うちつけにや思さむ」と、心恥づかしかて、やすらひ給ふ。

源氏の君は、おっしゃったとおり、十六夜の月の美しい頃にお越しになりました。「まあ、お気の毒ですこと、せつかくお越しいただいたのに、今夜はお琴の音が冴えて聞こえそうな空模様でもござせんのに」命婦は申し上げました。けれど、「そんなことをいわずに、姫君のところへ行って、一曲だけでもお弾きになるよう、おすすめておくれ。このまま何も聞かずに帰るのは残念だから」

とおっしゃいます。

姫君はかすかに琴の音を鳴らされ、その音色は源氏の君にはゆかしく聞こえませんでした。それほどお上手ではないのです。けれど、琴はもともと音色の格別味わい深い楽器ですから、聞きにくくはお感じになりません。ひどく一面に荒れはてた淋しいお邸に、かつては常陸の宮と呼ばれた父君が、古風に大切にお育てになられたのだろうに。今はその名残りもとどめず、姫君はどれほど悲しい思いをしておられるのか。昔の物語に寂しいところには、数々のあわれな話があります。思い耽られるたびに、いい寄ってみたいお気持ちこそそられますが、あまりに唐突ではないか、躊躇っておられました。

ここから思いがけず、頭の中將との恋争いになります。

君達(源氏と頭の中將)は、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつるすまひの様なども、やうかへてをかしう思ひ続け、あらまじごとに、「いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ね居たらむ時、見そめていみじう心苦しきは、人にももて騒がるばかりやわが心もさもあしからむ」などさへ、中將は思ひけり。この君のかう気色ばかりありき給ふを、まさにさては過ぐし給ひてむや、と、なまねうあやふがりけり。

頭の中將も思い悩みます。「もし仮に、美しくて可憐な女が、荒れはてたとこゝろに長い年月住んでいたとしたら、たまらなくいじらしくなり夢中になつて、世間の噂になるほど見苦しく取り乱すだろう」頭の中將は、源氏を意識するがゆえ

に、より空想に乱されます。でも、二人は友人なので、争うことはありませんでした。八月（はづき）廿余日、宵過ぐるまで待たるゝ月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへの事語り出でて、うち泣きなどし給ふ。いと良き折かなと思ひて、御消息や聞えつらむ、例のいと忍びておはしたり。月やうやう出でて、荒れたる籬（まがき）のほど疎ましく、うちながめ給ふに、琴そゝのかされて、ほのかに掻き鳴らし給ふ程、けしうはあらず。少し気近う今めきたる気をつけばや、とぞ、みだれたる心には、心もとなく思ひ居たる。人目しなき所なれば、心安く入り給ふ。八月の二十日余りのことでした。月がなかなか昇らないので夜が更けるまでが待ち遠しく、いつになれば月が見えるか分かりません。空には星の光ばかりがきらめいて、松の梢に吹く風の音が心細く聞こえます。そんな夜、姫君は昔のことを思い出されて、しみじみ命婦とお話しになりお泣きになるのです。命婦はちょうど良い折だと思つて、お報せしたのでしょうか。源氏の君はいつものようにお忍びでお越しになりました。月は次第に昇り、荒れた籬のあたりがよそよそしく照らされているのを、眺めておられます。すると命婦に勧められたのか、姫君が琴をかすかに鳴らす音が聞こえて来ました。その音色はなかなかたいしたものでした。夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬに

いぶせさ添ふる宵の雨かな（源氏）

夕霧の晴れるように、あなたの心がまだ溶けたとも見えぬゆえ、今宵の雨の、なお憂鬱なことよ。

姫君はもちろん周りの人々も心乱れて、返歌もままならぬ状況になりました。

晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ
同じ心にながめせずとも（姫君）

晴れやらぬ心で、あなたのおいでを待つわたしのことを思いやってください。同じお心でなくても。

この進展しない原因を、源氏は知って驚愕してしまいます。

まづ、居丈みたびの高く、を背長に見え給ふに、「さればよ」と胸つぶれぬ。うちつきで、あなたとは見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗り物と覚ゆ。あさまじう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたる事、ことのほかにうたてあり。色は雪恥づかしく白うて真青まあざ（さを）に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面おも（おも）やうは、大方おどろおどろしう長きなるべし。

まづ、座高がいやに高くて、胴長なのが目に映りましたので、やはり思った通りだと、胸もつぶれるお気持ちになられます。その次に、みともないのは、お鼻でした。どうしてもそこに目が止まってしまいます。普賢菩薩の乗り物の象の鼻のようです。あきれればかり高く長く伸びている上に、先のほうが少し垂れ下がって、赤く色づいているのがことのほかいやな感じでした。

なつかしき色ともなしに何にこの

すゑつむ花を袖にふれけむ（源氏）

心ひかれる女（ひと）でもないのに、どうしてこの紅花（鼻）を相手にしたのだろうか。

「いまひとたびの あふこともがな」

情野千里

その人とは、妾（しょう）とも恋人とも名付け得ぬ関係なので、かつてに私設愛人などと曖昧宿（あいまいやど）的に正体をはぐらかしつつ暗黙の了解をうながすような、ポジション名を捨りだして使っている。なんの契約も約束もなく口約束さえ交わしていない結びつきは、どっちが誘ったかによらず、そのつど「いまひとたびの あふこともがな」の切羽詰まったものになる。その人は知らず、私はこの30年間を、詰まりつ放しの卵管を懐胎する雌鶏のように、内なる聖痕として暮らしてきたのだ。

水で口漱いでくちなわの恋歌

ちようちんあんこうが出てくるリバーサイドホテル

崩れつつ唄うわたくしは氷河

見ざる聞かざる言わざる松茸山のこと

水風呂を出て男言葉に変わる

白歯抜いてリンデンバームの木を植える

亡夫の姓を名乗るちさとのうすなさけ

水筒の白湯に白湯ほどの媚態

口八丁ついでに百夜通う鬼

囷には不向きな多肉植物の陽気



2024年11月11日(月) LingvoオクトM+ イーグレレひめじ4F③会議室

海埜今日子

私は出生から、小学校に上がるまで、世田谷に住んでいました。長屋のような家でした。父は売れない脚本家でした。その頃は売っていたのかもしれませんが。母はとても若かったので、騙されたと言っていました。

父は祖父の代まで、裕福な家で育ったからか、貧乏でしたが、気品がありました。私は幼稚園も行かれました。父は父によく似ていました。

私には二歳半ぐらいから、記憶があります。へどんな言語からも切り離された季節というより、むしろ言語の総体から切り離された季節（1）に近いあたりだと思えます。まだことばをよく知らないのに、楽しいような気分するとき、それをつかむために、頭のなかで、あるいは口に出して、リズムのよなもの、刻んでいました。

私は（記憶の徴候が現れ、やがて言語の岸辺で身震いして、そこに立つ）（2）、あるいは（いまだに自己がなかったときの自己について）（2）の、かけらを覚えていきます。サークラインをじっと見ながら、目を閉じます。光の輪が、くらげのように浮遊します。私は太陽にすらなれました。飽きることはありませんでした。

世田谷を引越すまでが、いちばん幸せだったと、いつも思っていました。私には尊敬している人がいます。その人が「じゃあ、その季節を詩のことばで書かなくてはいけないね」と言いました。私

が默契をやぶったので、十年来、没交渉です。私の詩はその人に少し似ているかもしれませんが。鶴屋南北はいいですよと言っていました。まだ読んでいません。

ことばを覚えてたところ、名前がとても新鮮でした。小田急線沿線に住んでいました。線路ぎわで、オダキュウセンの“オダ”の字は、海のほうにある小田原に行くから、オダなのだと、教えられたことがあります。私は枕木のはてまで、引きずられるようにして、オダワラ、オダワラと口ずさんでいました。そのころから海や水が好きでした。買い物というところと始発の新宿に出かけます。親戚の家には、路面電車で行きました。沿線の、若林、山下、代々木八幡、梅が丘、参宮橋、どれも懐かしい響きです。ちがうでしょ、世田谷代田って言うところ。私はわざと言い間違えをしたものでした。セタガヤライタ、セタガヤダイラ。父はともうれしそうでした。

今住んでいる土地は、とても静かなところ。わすれた頃に、電車のおどかる音が聞こえます。このあたりの商店街は、宮の坂だったか、豪徳寺だったかの、やさしい活気があるように感じられます。近くの植物園には、いつ行っても人けがありません。父はたくさんの草花を育てていました。裏切りということばが、誰かを引き裂いています。私は自分が生まれ育った場所の、正確な所在を知らないのです。

(1) 『アルプキウス』、(2) 『舌の先まで出かかった名前』(共にパスカル・キニヤール／高橋啓訳／青土社)



上記のQR コードでメールアドレスをダウンロードして電子版を送れと明記の上通信ください。PDFをお送りします。